長 久 寺 遺 跡 第2次
発掘調査報告書

2022年4月

株式会社　島 田 組

例　言

1　本書は，名古屋市東区白壁三丁目 2801 番 1、2809 番 1、2810 番 1 地内において株式会社愛洋産業が計画された事務所ビルの建設に伴い、株式会社島田組が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。

2　本調査の面積は、215 ㎡である。

3　調査期間は令和４年１月 11 日から１月 31 日まで実施した。

4　現地調査実施にあたっては、名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室（以下「文化財保護室」という）　真鍋直子氏の指導・監督のもと株式会社島田組が実施した。
発掘調査は、監督員　安孫子雅史、調査員　市田英介、測量　堀場集理が担当し行った。

5　本書の執筆は、Ⅱ（１）を文化財保護室　真鍋直子氏、Ⅰ、Ⅱ（２）、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを市田英介が担当した。

6　本書で示す方位、座標は国土第Ⅶ系（世界測地系）による。水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。

7　本書で使用した土壌色名及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

8　遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』に準じた。

9　現地調査では井上健三、奥淳一、尾崎裕司、高田茂、水野正博、整理作業では松田直子、宮原温美、阪田恭子、須藤歩の参加を得た。

10　発掘作業と整理作業で作成した実測図、写真、台帳等の記録資料及び出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。

目　次

Ⅰ 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ 調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Ⅲ 調査の成果　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅳ 調査の成果　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Ⅴ 総括・・・13
図 版・・14

Ⅰ　遺跡の位置と環境

名古屋市中央部には、熱田台地と呼ばれる洪積台地が存在する。北西部は東丘陵へとつづくが、この中央部に旧矢田川の浸食により形成された大曽根の窪地が南北方向へ帯状に分布する。

対象地は大曽根の北西部、熱田台地の北縁上に位置する。この付近は、台地でも標高の高い位置にあたり、段丘下の北方約 150 mにある名鉄瀬戸線尼ヶ坂駅までの比高差は約 10m である。

この台地北縁の段丘に沿って、本遺跡や北東に隣接して片山神社遺跡、南西部に東二葉町遺跡が存在する（図１、２）。以下、調査地域に所在する３遺跡の既往の調査から、当地域の時代毎の移り変わりを概観する。

縄文時代　長久寺遺跡は市内で最初の縄文遺跡の発見となる貝塚が確認されていたが、金城学院中学校内で行われた調査で、中期の竪穴建物、土坑、ピットが検出され、当該期の集落の存在が明らかとなった。片山神社遺跡では、早期から晩期の遺物が認められ、中期の炉跡が検出されている。東二葉町遺跡では、中期の竪穴建物とピットが検出されている。

この地域では、縄文時代早期から人々の活動がはじまり、断続的ではあるが人々の営みが続いていたことが窺える。

弥生時代　長久寺遺跡、片山神社遺跡で前期の溝、中期では片山神社遺跡で土器棺が検出されている。当域の様相が明らかなのは後期である。方形周溝墓が造営されており、墓域として利用される。

古墳時代　これまで、円筒埴輪の出土が認められていたことから、古墳の存在が示唆されてきたが、長久寺遺跡で中期の土坑から埴輪棺（４世紀後葉）が検出され、古墳が近隣に存在することを裏付ける結果が得られている。埴輪は後期までのものが出土している。東二葉町遺跡では、中期の円墳の周溝、ピットが検出されているほか後期の遺物が出土している。

古代　東二葉町遺跡では、７世紀末から８世紀前葉の竪穴住居、長久寺遺跡では、奈良時代の竪穴建物、溝、土坑、ピットが確認されている。片山神社遺跡では平安時代 10 世紀の灰釉陶器がまとまって出土しているほか、住居跡らしき遺構を検出したとの報告がなされている。

中世　片山神社遺跡で掘立柱建物に伴うと考えられるピット群が確認されているのをはじめ、長久寺・東二葉町遺跡でもピット、土坑、溝が検出されている。時期は概ね鎌倉時代（13 世紀）であり、当該期に活発な土地利用があったことが窺える。

中世末以降は、長久寺の寺域、武家の屋敷地として利用され、近世後期から町屋となる。

図１　周辺遺跡分布図

図２　調査地地形図（「２万正式図」明治 24 年）

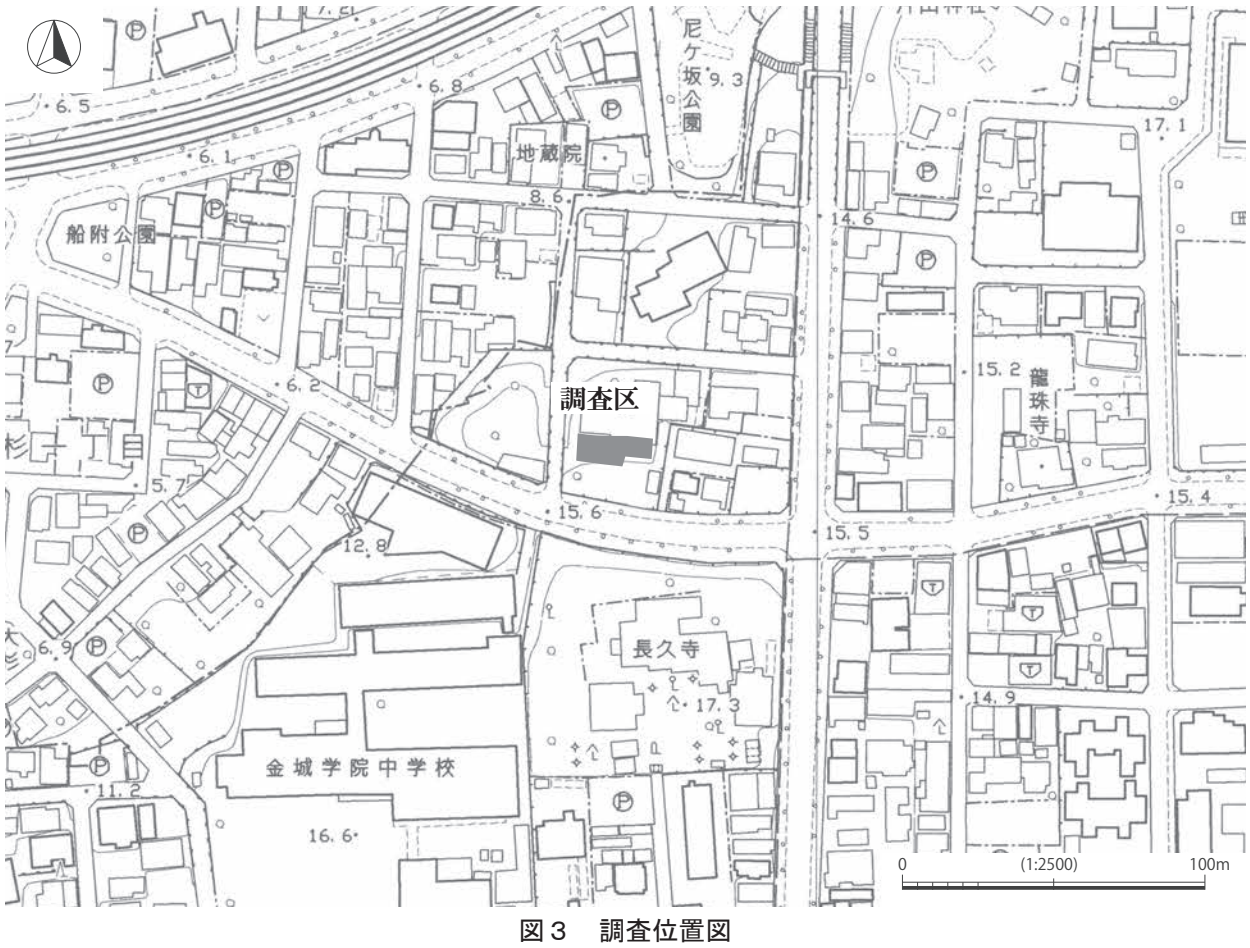


図３　調査位置図

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

今回の調査は、株式会社愛洋産業（以下、事業者）が名古屋市東区白壁三丁目 2801 番 1、2809 番 1、2810 番 1（図３）に事務所ビルの建設を計画し、名古屋市教育委員会（以下、教育委員会）に埋蔵文化財の取り扱いについて照会をしたことに始まる。令和３年６月 18 日に事業者より試掘調査依頼書が提出されたため、試掘調査を実施した。その結果、中世の遺物及び遺構が確認された。６月 30 日に文化財保護法（以下、同法）第 93 条第１項に基づく届出（解体工事）が提出され、７月 13 日付け３教文第 4-133 号で工事立会の旨通知をした。解体工事に伴い旧建物及び築山など試掘調査時に調査することが出来なかった場所について遺跡の残存状況を確認した。9 月 24 日に同法に基づく届出（新築工事）が提出され、10 月８日付け３教文第 4-204 号にて発掘調査の実施を通知した。12 月１日に事業者、株式会社島田組、教育委員会の三者において協定を締結し、翌 12 月１日に同法第 92 条第１項に基づく届出を愛知県県民文化局に提出した。12 月９日付け３文芸第 2002 号にて受理通知を受けたため、令和４年１月 11 日より調査を開始した。

（2）日誌抄

令和４年１月 11 日に調査区の設置、発掘道具・機材、重機、仮設事務所等の搬入作業を行った。

１月 12・13 日には、文化財保護室　真鍋直子氏による調査範囲の確認の後、西から機械掘削、遺構検出を行った（図４）。

１月 14 日には、調査区全面を清掃し遺構の検出を行った。

１月 17 日には、ピット、土坑の半裁、重複する SD01 と SF01 の重複関係を確認するためサブトレンチを設定し掘削を行った。

１月 18 ～ 21 日には、ピット、土坑、SD01 の記録作業を行いながら完掘したのち、SF01 の掘削を行った（図５）。

１月 25 日には、遺構完掘全景撮影に向けて、調査区全面の清掃と場内の整理を行った。

１月 26 日には、遺構完掘全景撮影。ラジコンヘリコプターを用いた空中撮影。遺構平面図、調査区壁断面図等の記録作業を行った。真鍋直子氏による完掘状況の検査が行われた。

図４　機械掘削、遺構検出状況

図５　SF01 掘削状況

１月 27・28 日には、調査区の埋戻し、調査資材等の撤去作業を行い、31 日に重機、仮設事務所等を搬出し調査を終了した。

Ⅲ　調査の成果　遺構

（1）調査の概要

調査地は台地北縁辺の標高約 17.0m に位置し、西、東側は宅地造成の際に行われたと思われる切り土により急斜面となる。調査区は東西 25m、西辺９m、東辺７m の長方形状を呈し調査面積は 215 ㎡である。試掘調査にもとづき盛土及び攪乱を地山上面まで重機で除去し、以下は人力で掘削を行った。遺構の測量はトータルステーションと写真測量を併用した。

遺構は地山上面(T.P＝16.6～16.3m)で検出した。検出面は西から東へ傾斜する。強く削平を受け、重機の爪痕が複数個所残るなど多くの攪乱がみられた。遺構は、平安時代(11 世紀前半)の道路遺構、鎌倉時代（13 世紀前半）のピット１基、土坑３基、溝１条、鎌倉時代（13 世紀後半）以降の掘立柱建物１棟を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砥石、瓦などが出土した。

（2）遺構の概要

１．基本層序（図６、図版２）

第１層　盛土

第２層　攪乱

第３層　灰色（10Y5/1）粘質土　中～粗砂が混り、地山ブロックを多く含む。
　　現代の攪乱及び整地土。

第４層　明黄褐色（2.5Y6/8）粘質土でシルト混じる。地山

第５層　灰白色（10Y7/2）砂質土　粗砂主体でしまりが強い。

２．遺構（図７）

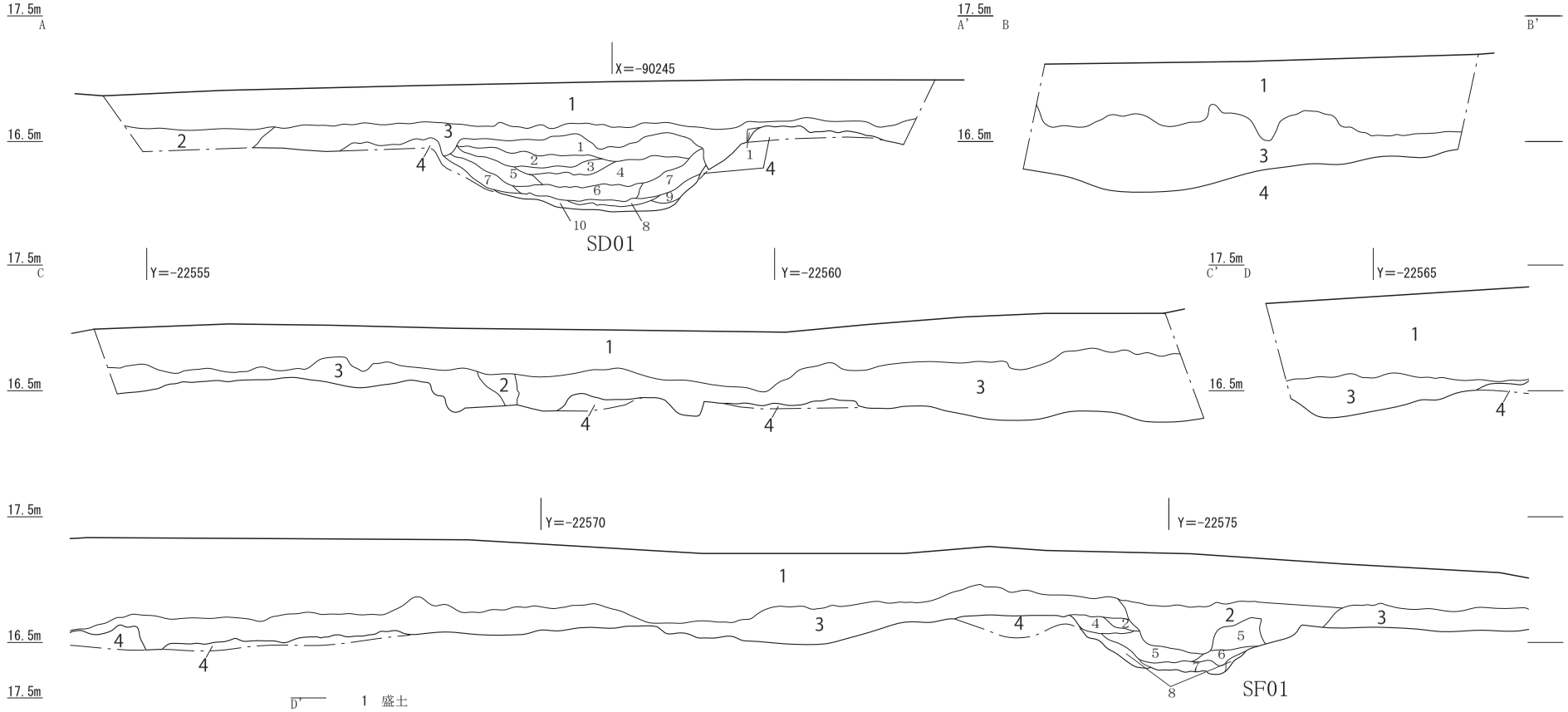
遺構はピット１基、土坑３基、溝１条、掘立柱建物１棟、道路遺構を検出した。時期は出土遺物からピット、土坑、溝は鎌倉時代（13 世紀前半)、道路遺構は平安時代（11 世紀前半）に属す。埋土は鎌倉時代のものが暗褐色土（7.5YR3/4)、平安時代のものは褐灰色土（7.5YR4/1）を呈する。以下各遺構の概要を記す。

平安時代（11 世紀前半）

道路遺構を検出した。

SF01　（図７・８、図版３）

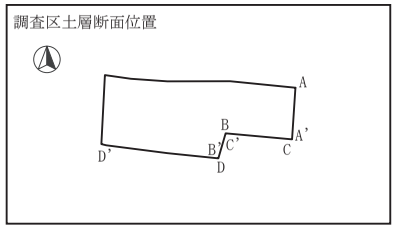
調査区西部で検出した南北方向に延びる道路遺構である。傾きはＮ－17°－Ｅである。規模は南端の上端幅が 1.89m、下端幅が 0.78m、深さ 0.41m である。北端の上端幅は 2.72m で下端幅は 1.4m、深さ 0.52m で、底面は南から北へ 0.35m 低く傾斜する。底面の中央は、楕円形の窪みが連続して並ぶ、波板状凹凸面と呼ばれる窪みを確認した。埋土は褐灰色（7.5YR4/1）粘質土と、底面の窪み埋土であるにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土の大きく２層に分かれる。窪み内の一部では、直径５cm大の角礫や玉砂利状の礫を検出したが、流水の痕跡が認められなかったことから、人為的に入れられたものと考えられる。硬化面は確認できず、埋土にしまりもみられなかった。SD01 と重複し切られる。遺物は土師器、灰釉陶器、須恵器などの遺物が少量出土した。



1　盛土
2　撹乱
3　10Y5/1 灰色粘質土　中～粗砂が混り、地山ブロックを多く含む。現代の撹乱、及び整地土。
4　2.5Y6/8 明黄褐色粘質土　シルト混じる。地山
5　10Y7/2 灰白色砂質土　粗砂主体。しまり強い。

SF01
2 7.5YR4/1 褐灰色土　細砂が混じる。しまり弱い。
4 10YR3/2 黒褐色土　細砂が混りφ1～2cm大の地山ブロックを多量に含む。しまり弱い。
5 10YR3/3　暗褐色土 細～中砂が混じる。
6 2.5Y3/1 黒褐色土 中砂が混じり、φ0.2cm大の地山ブロックを少量含む。
7 7.5YR4/2 灰褐色土 細～中砂が混じる。
8 10YR5/1 褐灰色土　中砂が混じり、地山ブロックを多く含む。崩落土。
1、3はセクション土層断面に記載

SD01
1 7.5YR3/4 暗褐色土 細～中砂が混じる。しまり弱い。
2 7.5YR4/2 灰褐色粘質土　極細砂が混じる。
3 7.5YR4/2 灰褐色土　中～粗砂が混じる。
4 10YR4/3 にぶい黄褐色土　極細～細砂が混り、φ0.5～1cm大の地山ブロックを含む。
5 7.5YR4/3 褐色土 細～中砂が混じる。
6 10YR3/2 黒褐色土 細砂が混じる。φ0.5cm大の地山ブロックを少量、炭化物を含む。
7 10YR3/1 黒褐色粘質土 細～中砂が混じり、炭化物を含む。
8 10YR3/3 暗褐色砂質土　細砂主体。
9 10YR4/6　褐色粘質土　細～中砂が混り、φ0.5cm地山ブロック少量含む。
10 10YR4/2 灰黄褐色粘土



0　(1:50)　2m

図６　東・南壁土層断面図

図６　東・南壁土層断面図

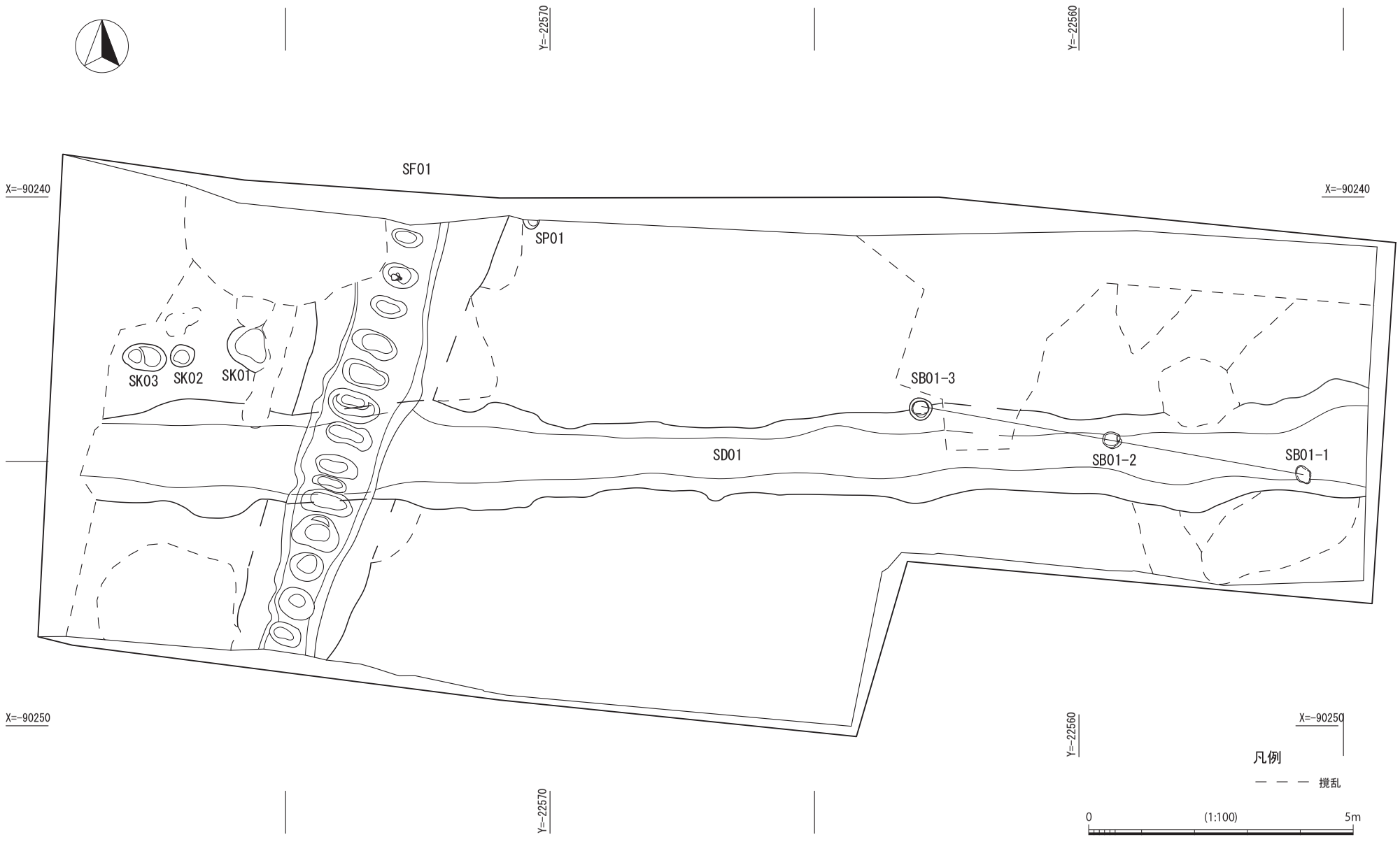
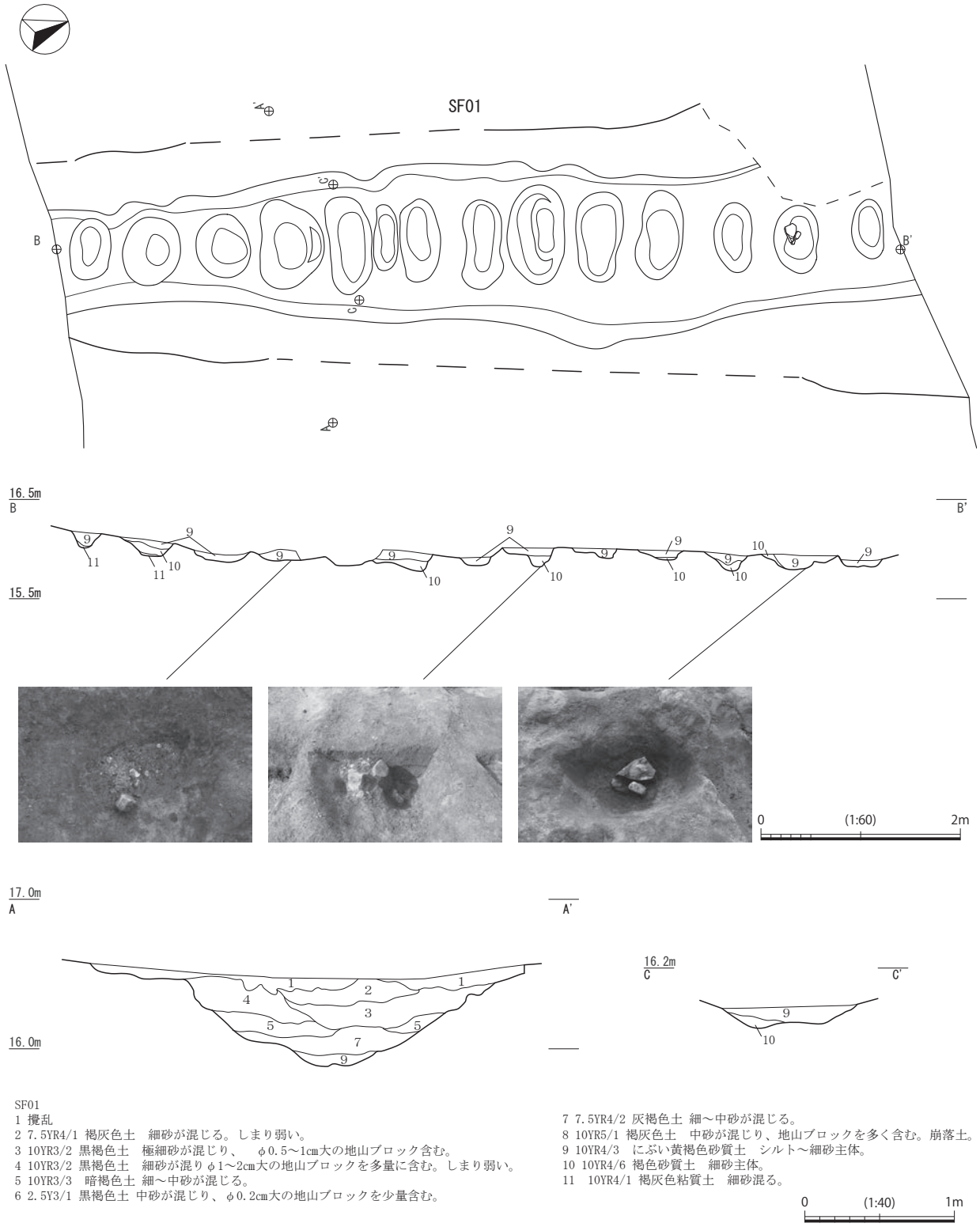


図７　遺構平面図



SF01
1 攪乱
2 7.5YR4/1 褐灰色土　細砂が混じる。しまり弱い。
3 10YR3/2 黒褐色土　極細砂が混じり、　φ0.5～1cm大の地山ブロック含む。
4 10YR3/2 黒褐色土　細砂が混りφ1～2cm大の地山ブロックを多量に含む。しまり弱い。
5 10YR3/3　暗褐色土 細～中砂が混じる。
6 2.5Y3/1 黒褐色土 中砂が混じり、φ0.2cm大の地山ブロックを少量含む。
7 7.5YR4/2 灰褐色土 細～中砂が混じる。
8 10YR5/1 褐灰色土　中砂が混じり、地山ブロックを多く含む。崩落土。
9 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　シルト～細砂主体。
10 10YR4/6 褐色砂質土　細砂主体。
11　10YR4/1 褐灰色粘質土　細砂混る。

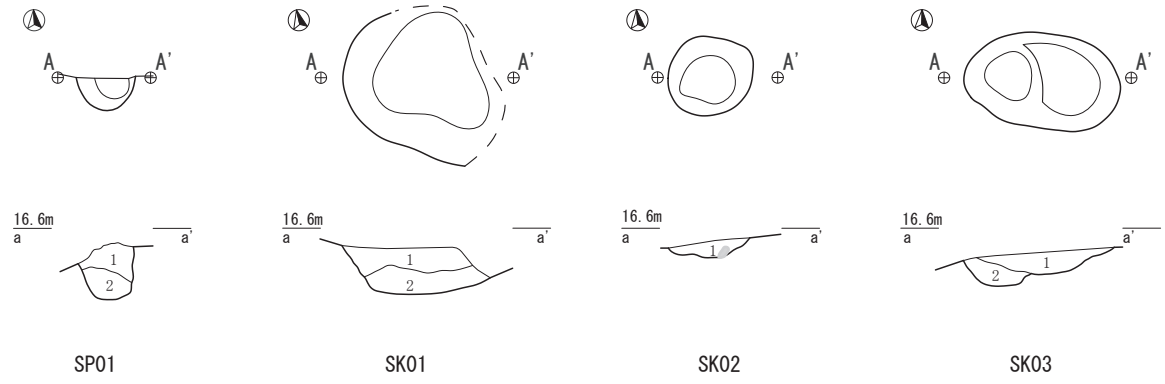
図８　SF01 平・断面図

鎌倉時代（13 世紀前半）

ピット１基、土坑３基、溝１条を検出した。

SP01　（図７・９）

調査区北西部の SF01 東肩横で検出した。北部分が調査区外に延びる。検出規模は長軸 0.31m、短軸 0.17m、深さ 0.26m である。埋土は細～中砂が混じる暗褐色土（7.5YR3/4）を主体として下部に地山のブロックが多く混じる。



1 7.5YR3/4 暗褐色土　細～中砂が混じり φ0.5cm大の地山ブロック含む。
2 10YR6/3 にぶい黄橙色土　細砂混が混り φ1cm大の地山ブロックを多く含む。

1 7.5YR3/4 暗褐色土　細～中砂が混じり φ0.5cm大の地山ブロック少量含む。
2 10YR4/4 褐色土　細砂が混り φ0.5～1cm大の地山ブロックを多く含む。

1 10YR3/2 黒褐色土　中～粗砂が混る。

1 7.5YR3/4 暗褐色土　細砂が混じる。
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 細砂が混じり、φ1cm大の地山ブロックを含む。

0　(1:40)　1m

図９　SP01、SK01 ～ 03 平・断面図

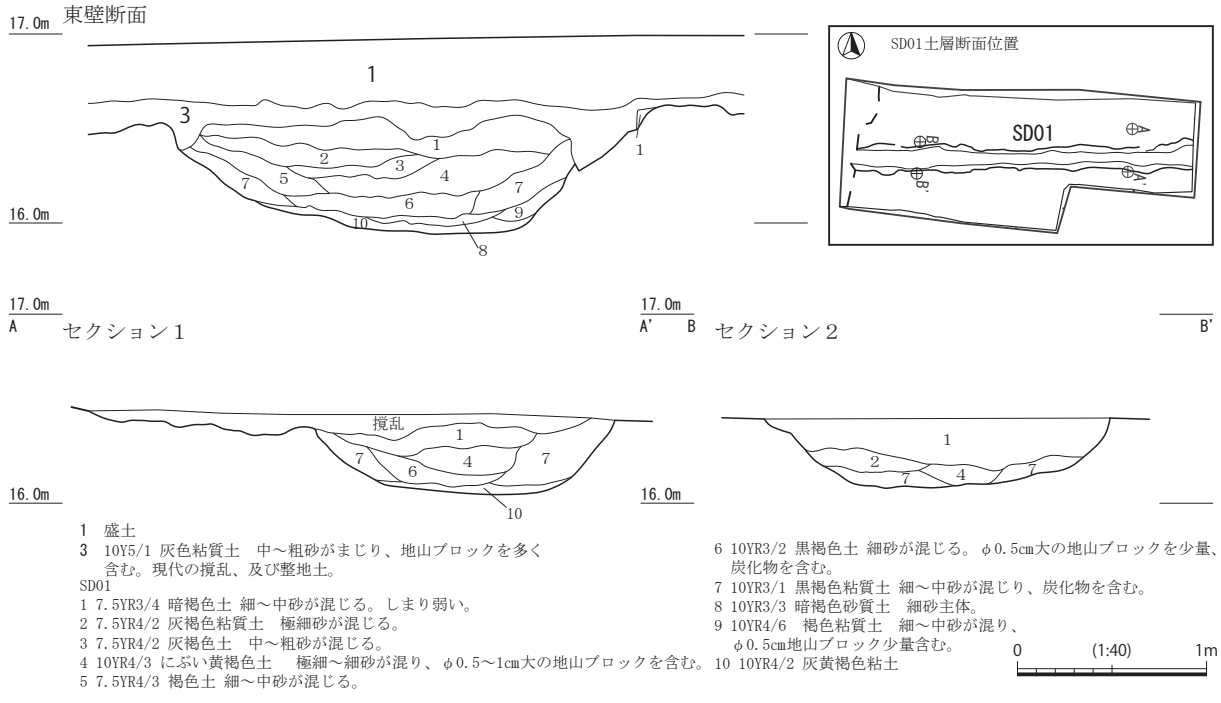


図 10　SD01 土層断面図

SK01　（図７・９）

調査区北西端部の SF01 西肩横で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 0.89m、短軸 0.77m、深さ 0.34m である。埋土は上層が細～中砂混る暗褐色土（7.5YR3/4）、下層が地山のブロックを多く含む褐色土（10YR4/4）である。

SK02　（図７・９、図版５）

調査区北西端部の SK01 の西で検出した。平面形は円形を呈する。規模は長軸 0.48m、短軸 0.43m、深さ 0.08m である。埋土は中～粗砂が混じる黒褐色土（10YR3/2）　である。

SK03　（図７・９、図版５）

調査区北西端部の SK02 の西で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 0.83m、短軸 0.5m、深さ 0.1m である。埋土は上層が細砂が混じる暗褐色土（7.5YR3/4）で下層は、細砂が混じるにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。底面の西側に柱痕と思われる窪みがあることから抜き取り

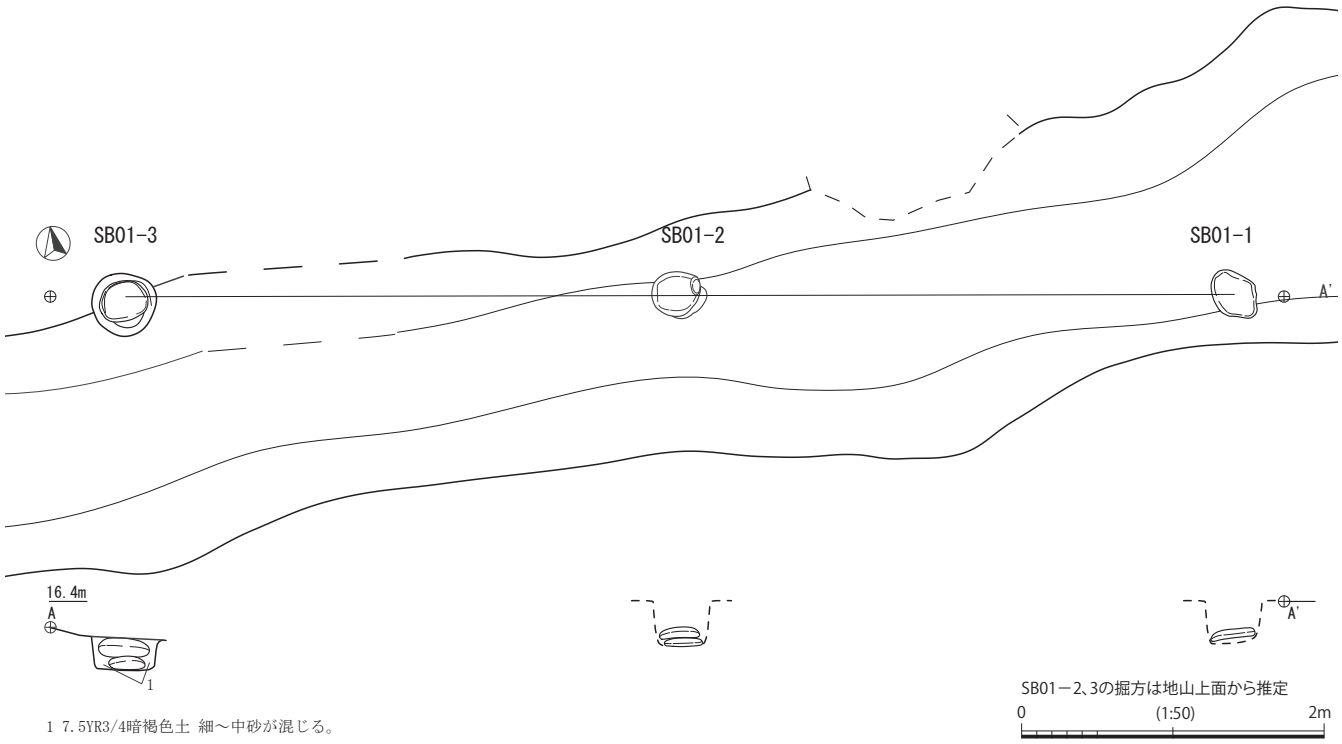


図 11　SB01 平・断面図

穴と思われる。

これらのピット、土坑内からの出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から、中世に属すものと考えられる。

SD01　（図７・10、図版４・５）

調査区中央部で検出した東西方向に延びる溝である。規模は西端が上端幅 0.96m で下端幅は 0.64m、深さ 0.38m、東端は上端幅 2.24m で下端幅 1.52m、深さ 0.53m である。底面は西から東へ 0.25m 低く傾斜する。埋土は大きく３層に分かれる。１～４層は埋戻し土で、しまりの弱い暗褐色（7.5YR3/4）粘質土である。５～７層も埋戻し土で黒褐色（10YR3/2）粘質土である。８～ 10 層は掘削直後の機能時の堆積層で最下層に粘土、この上層に砂質土が堆積する。

１～４層と５～７層では層様に変化がみられ、遺物が４層の標高で多く出土したことから、再掘削が行われたと考えられる。遺物は山茶碗、円筒埴輪などが出土した。

鎌倉時代（13 世紀後半）以降

掘立柱建物１棟を検出した。

SB01　（図７・11、図版５）

調査区東部で検出した掘立柱建物である。北西 - 南東方向に３基並ぶ。柱穴内には直径 0.3 m大の平らな円礫の根石があり、内２基は礫２個が重ねておかれていた。柱間は3.6 m（約12尺）である。礫は、SD01 の掘削中に確認し、溝に伴うものと考えていたが、後に SB01 － 3 を検出し、間隔や礫上面のレベルがほぼ同じであること、SB01 － 2 が SB01 － 3 と同様に円礫を重ねてあることから、建物に伴う根石であることを確認した。建物は N － 10°－ E 傾く。柱穴の展開については、北は攪乱、南は調査区外に位置する寸法であるため不明である。時期は SD01 を切ることから、鎌倉時代（13 世後半）以降である。

Ⅳ　調査の成果　遺物

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砥石、瓦などが出土した（表１）。

SF01 出土遺物　（図 12、図版１・３）

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。

１は土師器で小型の壺の口縁である。古墳時代前期に属すものと思われる。

２～５は灰釉陶器である。２、５は、高く直線的に延びる高台をもつ。３は皿で、内外面に釉がかかる。H72 窯式である。４は高台断面が三角形状を呈することから百大寺窯式と考えられる。

６は須恵器の鉢で、平底で体部は直線的に延びる。そのほか 37（図版６）の水瓶が出土した。

SD01 出土遺物　（図 13、図版１～３）

弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、円筒埴輪、砥石、サヌカイト片などや混入品であるが、陶器、瓦器が出土した。

７は弥生土器の壺で、沈線を施したのち、竹管文を施す。弥生時代前期に属する。

８、９は円筒埴輪で、外面に８は縦方向のハケ、９は横方向のハケを施す。９は川西編年の第Ⅳ期である。

10 は須恵器の甕である。外面はタタキ、内面は丁寧にナデを施す。古墳時代中期初頭のものと思われる。

11、12 は灰釉陶器の碗である。11 は内面に目跡が残る。外面は施釉前にハケ状の工具で調整を施す。12 の器壁は薄く、底部端部に籾殻の圧痕が残る。いずれも、底部から緩やかに立ち上がることから百大寺窯式と思われる。

13 ～ 30 は山茶碗である。第５型式から第６型式に該当するものと考えられる。13 ～ 16、24 は胎土が密な東濃型で第５型式と考えられる。高台は低いものの形状が三角形を呈する。24 は、口縁端部を丸くおさめる。17 ～ 23、25 ～ 30 は、砂粒を多く含む胎土の粗い尾張型である。第５型式は 21、22、26 である。26 は口縁端部にやや丸みがみられる。19、21 は高台がやや高く厚みをもつ。第６型式は 17、18、20、22、23、25、27 ～ 30 と考えられる。17、18 は小皿で、直線的に開き、口縁端部に厚みをもつ。25・27 は、口縁端部に面をもち、ヨコナデが明瞭である。20、22、23、28 ～ 30 は高台が低く、調整も粗いが、体部への立ち上りに丸みがある。13、15、27、30 の底部には、籾殻の圧痕が残る。

31 は瀬戸美濃系の擂鉢、32 は瓦器の風炉である。いずれも混入品で近世以降のものである。

33・34 は砥石で、33 は風化し擦痕は不明瞭である。34 は両面と、側面の一部に砥面が残る。そのほか 41（図版８）の大型の砥石も出土した。

第２～３層内出土遺物（図 14、図版３）

近世以降の陶磁器、瓦の他、土師器、須恵器、山茶碗、円筒埴輪、砥石などが出土した。

35 は常滑焼の甕である。口縁上端は平坦で内面は突出し、外面は厚みをもつ。36 は瀬戸美濃系の皿である。時期はいずれも近世以降である。

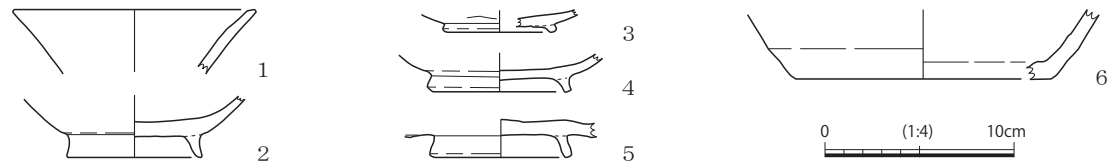


図 12　SF01 出土遺物

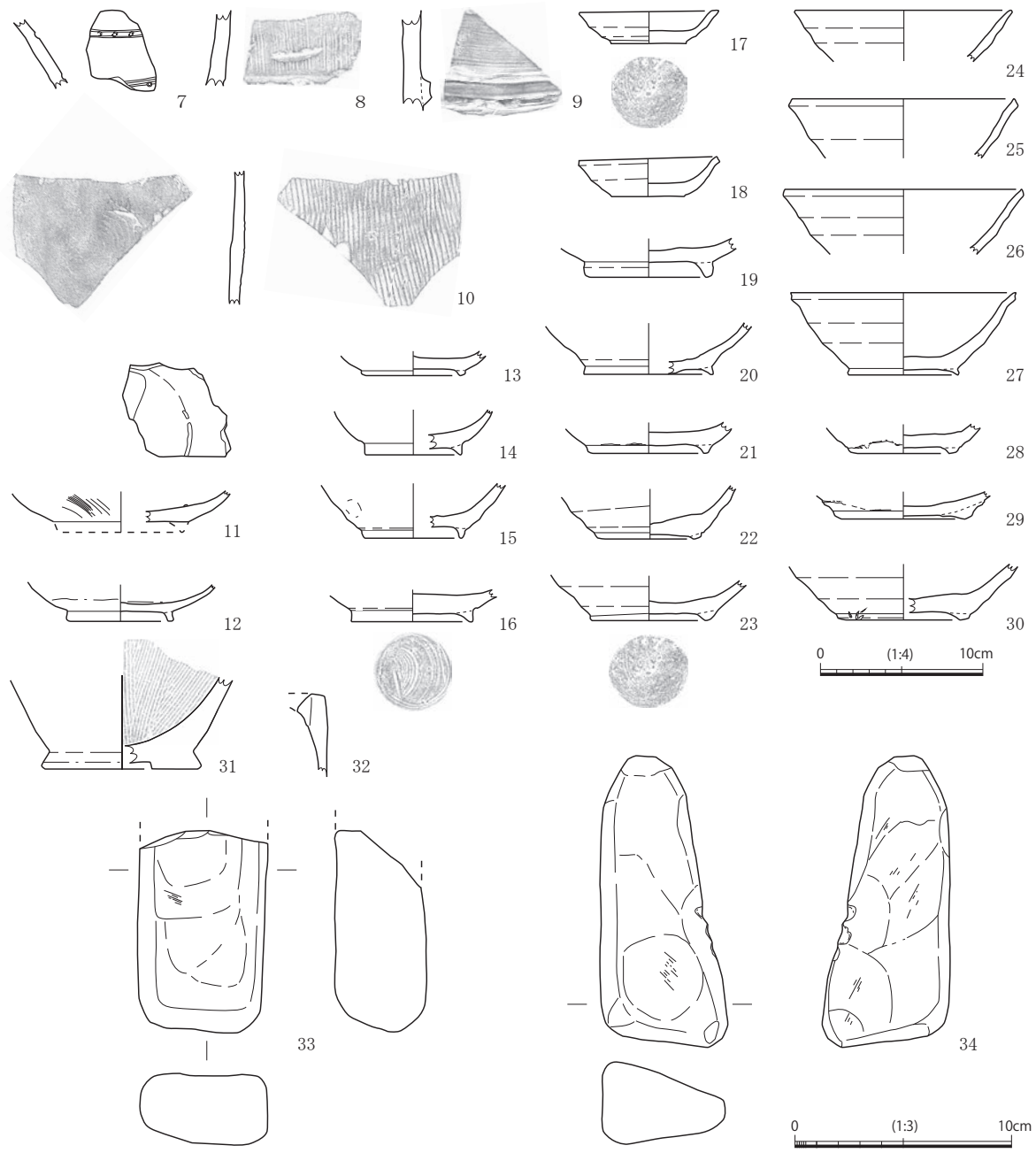


図 13　SD01 出土遺物

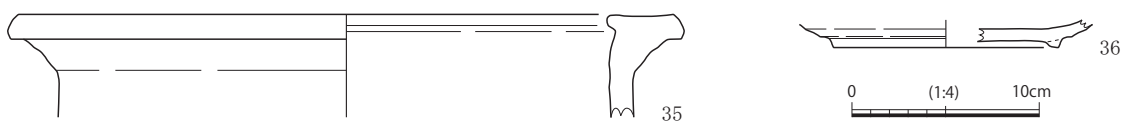


図 14　第２～３層出土遺物

表１　遺物観察表

掲載番号	種類	種別	出土遺構	口径（cm）()は復元・残存値	底径（cm）()は復元・残存値	器高（cm）()は復元・残存値	残存率（%）	焼成	胎土	色調	備考
1	土師器	壺	SF01	12.8	—	(3.4)	口10	硬	やや粗	内:10YR6/6 明黄褐色 外:10YR6/6 明黄褐色	
2	灰釉陶器	碗	SF01	—	7.0	(3.3)	底50	硬	密	内:2.5Y7/3 浅黄色 外:2.5Y7/1 灰白色	
3	灰釉陶器	皿	SF01	—	5.4	(1.2)	底15	硬	密	内:2.5Y7/1 灰白色 外:2.5Y7/1 灰白色	
4	灰釉陶器	碗	SF01	—	7.0	(2.1)	底100	硬	密	内:2.5Y7/4 浅黄色 外:2.5Y7/3 浅黄色	
5	灰釉陶器	碗	SF01	—	7.0	(2.0)	底100	硬	密	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
6	須恵器	鉢	SF01	—	13.6	(3.7)	底5	硬	やや粗	内:5Y7/1 灰白色 外:5Y7/1 灰白色	
7	弥生土器	壺	SD01	—	—	(4.3)	体部破片	やや軟	やや粗	内:7.5YR5/6 明褐色 外:7.5YR5/6 明褐色	
8	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(4.7)	破片	硬	やや粗	内:7.5YR7/6 橙色 外:7.5YR7/6 橙色	
9	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(6.3)	破片	硬	やや粗	内:7.5YR7/6 橙色 外:7.5YR7/6 橙色	
10	須恵器	甕	SD01	—	—	—	体部破片	硬	やや密	内:5Y6/2 灰オリーブ色 外:5Y6/2 灰オリーブ色	
11	灰釉陶器	碗	SD01	—	(8.2)	(1.9)	底20	硬	やや粗	内:5Y6/1 灰色 外:5Y6/1 灰色	
12	灰釉陶器	碗	SD01	—	6.0	(2.3)	底100	硬	密	内:2.5Y7/1 灰白色 外:2.5Y7/1 灰白色	
13	山茶碗	碗	SD01	—	5.8	(5.8)	底50	硬	密	内:2.5Y7/4 浅黄色 外:2.5Y7/4 浅黄色	
14	山茶碗	碗	SD01	—	5.8	(2.8)	底25	硬	やや密	内:2.5Y7/3 浅黄色 外:2.5Y7/3 浅黄色	
15	山茶碗	碗	SD01	—	6.0	(3.4)	底50	硬	密	内:2.5Y7/4 浅黄色 外:2.5Y7/4 浅黄色	
16	山茶碗	碗	SD01	—	7.0	(2.4)	底40	硬	やや粗	内:10YR7/2にぶい黄橙色 外:10YR7/2にぶい黄橙色	
17	山茶碗	小皿	SD01	6.4	6.6	2.0	完形	硬	やや粗	内:2.5Y7/3 浅黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
18	山茶碗	小皿	SD01	8.4	4.4	2.4	完形	硬	やや粗	内:10YR7/3 にぶい黄橙色 外:10YR7/3 にぶい黄橙色	
19	山茶碗	碗	SD01	—	7.0	(2.4)	底40	硬	やや粗	内:10YR7/2にぶい黄橙色 外:10YR7/2にぶい黄橙色	
20	山茶碗	碗	SD01	—	8	(3.2)	底40	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
21	山茶碗	碗	SD01	—	6.8	(1.9)	底50	硬	やや粗	内:2.5Y7/1 灰白色 外:2.5Y7/1 灰白色	
22	山茶碗	碗	SD01	—	5.4	(3.3)	底100	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
23	山茶碗	碗	SD01	—	7.0	(2.8)	底100	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
24	山茶碗	碗	SD01	13.2	—	(3.2)	口5	硬	やや粗	内:2.5Y6/3 にぶい黄色 外:10YR7/4 にぶい黄橙色	
25	山茶碗	碗	SD01	13.8	—	(3.7)	口10	硬	やや粗	内:5Y7/1 灰白色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
26	山茶碗	碗	SD01	14.6	—	(4.0)	口15	硬	やや粗	内:2.5Y5/3 黄褐色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
27	山茶碗	碗	SD01	13.8	6.8	(5.1)	40	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
28	山茶碗	碗	SD01	—	5.6	(1.8)	底50	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
29	山茶碗	碗	SD01	—	7.6	(1.7)	底90	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
30	山茶碗	碗	SD01	—	7.0	(3.4)	底25	硬	やや粗	内:2.5Y7/2 灰黄色 外:2.5Y7/2 灰黄色	
31	陶器	擂鉢	SD01	—	9.4	(5.2)	底20	硬	やや粗	内:10YR5/4にぶい黄褐色 外:10YR2/1 黒色	
32	瓦器	風炉	SD01	—	—	(5.2)	口縁部破片	硬	やや粗	内:N4/灰色 外:N4/灰色	
33	石器	砥石	SD01	長軸(9.2)	短軸(5.9)	厚さ4.2	—	—	—	—	重さ400g
34	石器	砥石	SD01	長軸13.6	短軸2.8	厚さ3.9	—	—	—	—	重さ371g
35	陶器	甕	第2～3層	35	—	(5.5)	口5	硬	やや粗	内:7.5YR5/8 明褐色 外:7.5YR5/8 明褐色	
36	施釉陶器	皿	第2～3層	—	12.0	(1.5)	底25	硬	やや粗	内:2.5Y6/4 にぶい黄色 外:2.5Y7/4 浅黄色	
37	須恵器	水瓶	SF01	—	—	(8.5)	体部破片	硬	やや粗	内:10YR7/3 にぶい黄橙色 外:10YR6/1 褐灰色	図版６
38	円筒埴輪	—	第2～3層	—	—	(3.4)	破片	硬	やや粗	内:7.5YR6/8 橙色 外:7.5YR6/8 橙色	図版７
39	円筒埴輪	—	第2～3層	—	—	(4.3)	破片	硬	やや粗	内:2.5Y8/4 浅黄色 外:2.5Y8/4 浅黄色	図版７
40	円筒埴輪	—	SD01	—	—	(5.6)	破片	硬	やや粗	内:10YR8/4 浅黄橙色 外:10YR8/4 浅黄橙色	図版７
41	石器	砥石	SD01	長軸19.8	短軸(15.3)	厚さ(13.3)	—	—	—	—	重さ4400g、図版８

V　総括

今回の調査で検出した遺構は、平安時代（11 世紀前半）の道路遺構、鎌倉時代（13 世紀前半）のピット１基、土坑３基、溝１条、鎌倉時代（13 世紀後半以降）の掘立柱建物１棟である。

遺物は弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗、近世以降の瓦、陶磁器の他、サヌカイトの剥片、円筒埴輪、砥石、瓦が出土した。

平安時代（11 世紀前半）　SF01 は、底面で波板状凹凸面を検出したことから、道路と判断した。凹凸面の痕跡の理由としては、運搬用の枕木の圧痕、牛馬歩行痕、滑り止めとしての路盤対策などや、路面築造に由来する雨水対策等の路床部構造などが考察されている。近郊の遺跡では、名古屋城三の丸遺跡第４・５次調査で検出されており、検出位置が、道路硬化面下の側溝際であることから、路面の崩落防止、雨水対策としての機能が推定されている。今回検出したSF01は、底面に傾斜があり、人為的に礫を入れていることから、水はけを意識したものと考えられる。凹凸面の間隔は狭く、側面の立上りが急であることから、底面を利用したとは考えにくく路面築造時の路床構造であると推測される。延長部に関しては、北約 50m 付近で行われた片山神社遺跡１次調査では同様の遺構が確認されていないことから、この東を延びるものと推定できる。この先には、社伝による創建が和同２年（709 年）とある片山神社が存在しており、道路との関係が示唆される。当該期の遺構は少なく、調査地域は集落の縁辺部にあたると考えられる。

鎌倉時代（13 世紀前半）SD01 は、底面の傾斜が、段丘崖と逆方向に低く傾斜し、積極的な流水の痕跡も認められなかったことから、区画を目的としたものと考えられる。時期は既往の調査で検出された遺構と概ね一致するがこれらの遺構の分布状況からは、集落としての様相は明らかでなく区画の目的は不明である。

本調査では、平安時代（11 世紀前半）、鎌倉時代（13 世紀）の遺構を検出することができ、調査地がこの時期、集落、居住域の縁辺であった様相を窺うことができた。また、当地域は、縄文時代中期は集落として、弥生時代後期から古墳時代は墓域として土地利用されているが、これらの時期の遺構が、展開しないことが確認できたことも、今後、本遺跡の各時期の歴史環境を考察する手掛かりになると考えられる。

参考文献
藤澤良祐　2007 「第１章第２節　灰釉陶器から山茶碗へ」『愛知県史　別編　窯業２』愛知県
川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号　日本考古学協会
中世土器研究会編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
近江俊彦　1997 「道路一覧」『古代交通研究』第７号
鷲坂有吾・下島健弘・杉山敬亮　2017 『長久寺遺跡発掘調査報告書　金城学院中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』 株式会社二友組
名古屋市見晴台考古資料館　1987 『東区白壁三丁目　片山神社遺跡発掘調査概要報告書』 名古屋市教育委員会
伊藤正人　1996 『片山神社遺跡第２次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
纐纈茂　2002 「片山神社遺跡（第３次）」『埋蔵文化財調査報告書 43』 名古屋市文化財調査報告 56　名古屋市教育委員会
伊藤正人　1999 『東二葉町遺跡第２次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
藤井康隆　2005 『東二葉町遺跡第３次発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
名古屋市見晴台考古資料館　1994 『名古屋城三の丸遺跡　第４・５次発掘調査－遺構編－』名古屋市教育委員会

半)

以

た。
ど
屋
ら、
り、
側
推
確
同
く、

水
検
く

査
代
期
掛

財
会
教

会

図　版

1．調査区全景（南東上空から）

2．遺構完掘状況（南上空から）

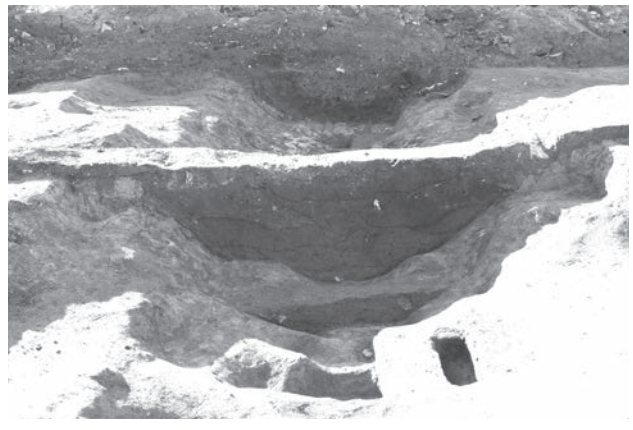
図版2　遺構

1．調査前状況
（南東から）

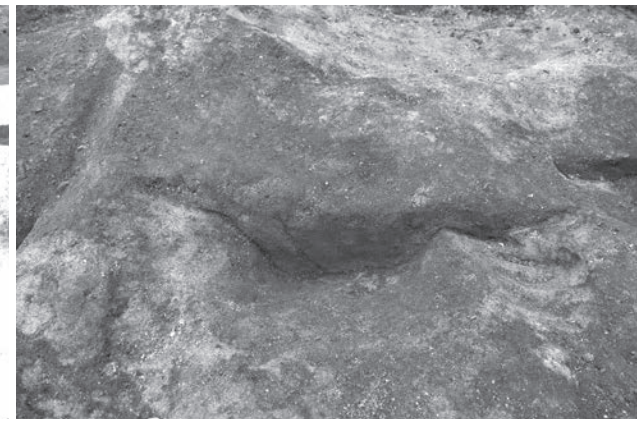
2．調査区南壁
（北東から）

3．調査区南壁 SF01 付近
（北から）

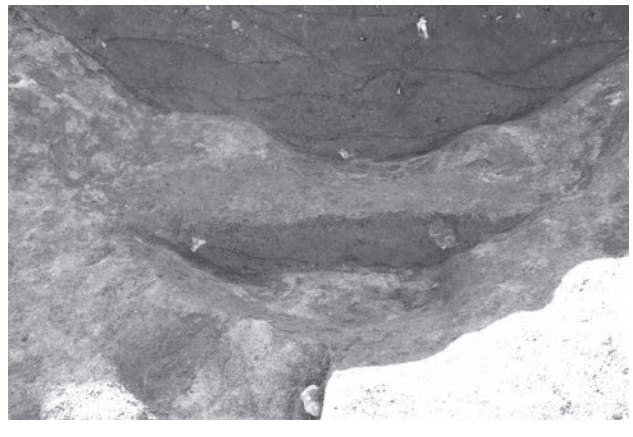
１．SF01 完掘状況（北から）



２．SF01 土層断面（北から）



３．SF01 凹凸面土層断面（東から）



４．SF01 凹凸面土層断面（北から）

５．SF01 遺物出土状況（東から）

１．SD01 完掘状況（東から）

２．SF01 南壁土層断面（西から）

３．SD01 セクション１土層断面（西から）

４．SF01 遺物出土状況（北東から）

５．SF01 遺物出土状況（北から）

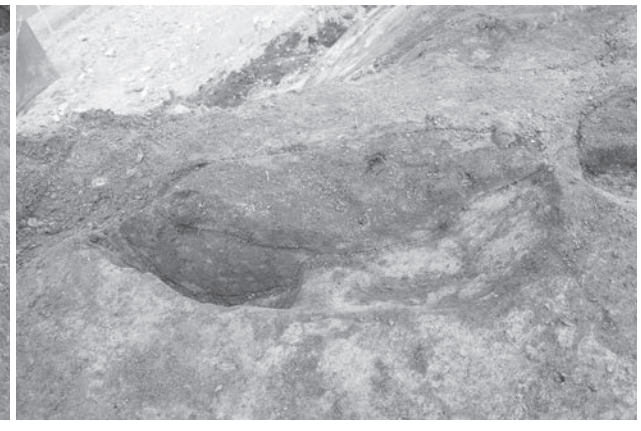
1．SD01 遺物出土状況（北東から）

2．SD01 遺物出土状況（北から）

3．SD01 遺物出土状況（北東から）

4．SD01 遺物出土状況（南から）

5．SK02 土層断面（南から）

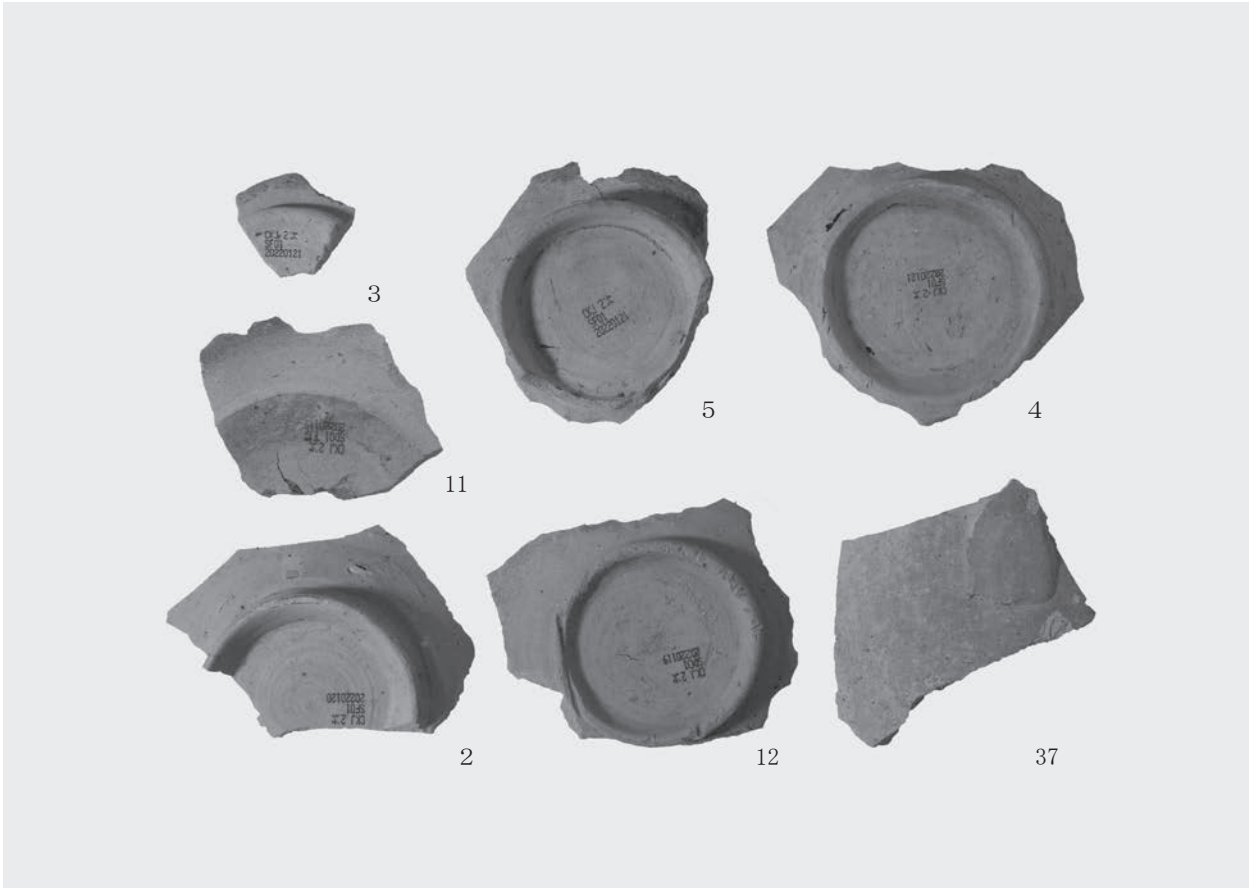


6．SK03 土層断面（南から）

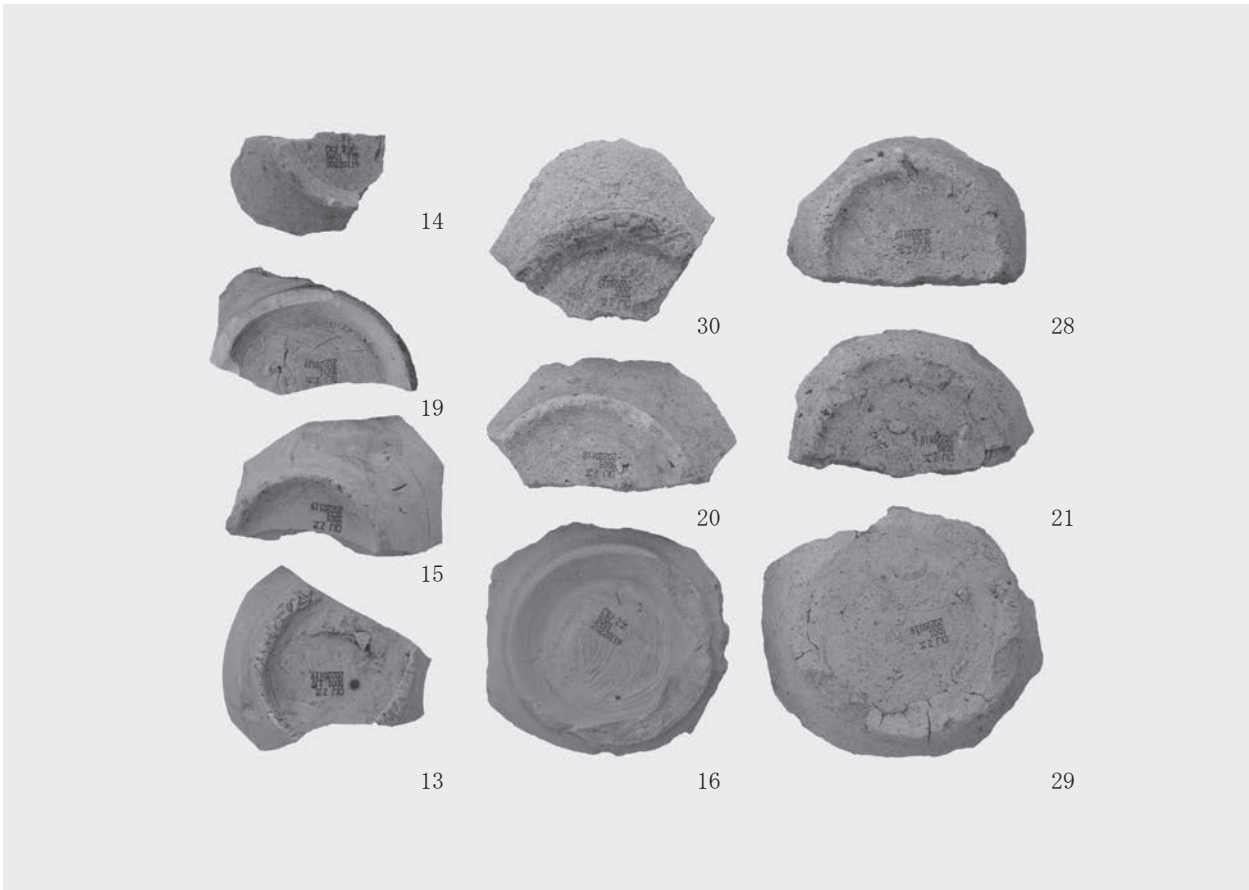
7．SB01 完掘状況（北西から）

8．SB01-3 土層断面（南から）

図版６　SF01・SD01出土遺物

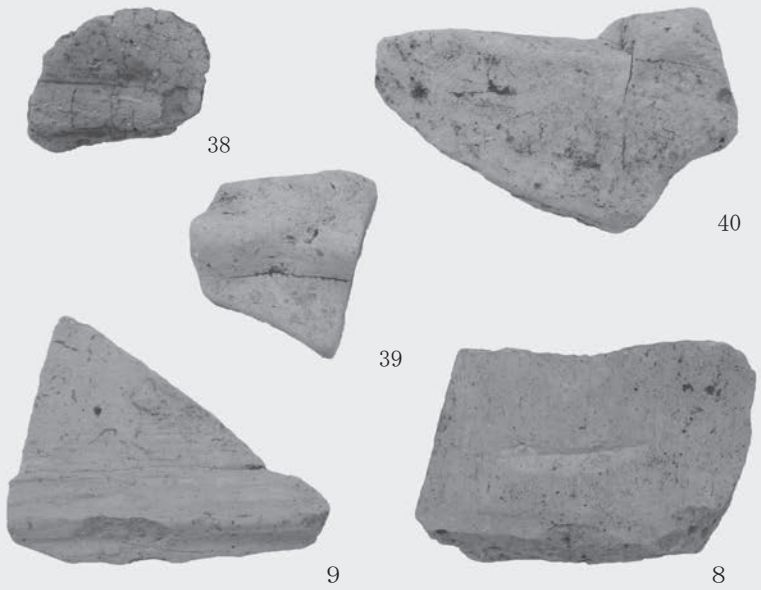


１．灰釉陶器碗（２～５・11・12）、須恵器水瓶（101）



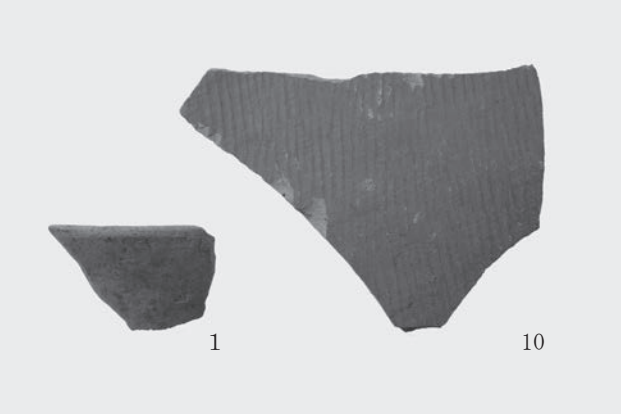
２．山茶碗（13～16・19～21・28～30）

図版7　SD01・第2～3層出土遺物



1．円筒埴輪（８・９・102～104）

2．弥生土器壺（７）



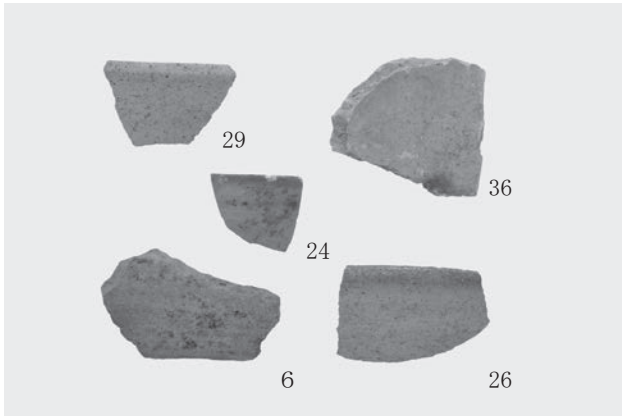
3．土師器壺（１）、須恵器甕（10）

4．山茶碗（27）

5．山茶碗　小皿（17・18）

図版8　SF01・SD01・第2～3層出土遺物

1．山茶碗（22・23）



2．須恵器鉢（6）、山茶碗（24・26・29）、陶器皿（36）

3．陶器甕（35）・擂鉢（31）

4．砥石（33・34・105）

報告書抄録

ふりがな	ちょうきゅうじいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長久寺遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	真鍋直子、市田英介
編集機関	株式会社　島田組
所在地	〒581-0034　大阪府八尾市弓削町南３丁目20番地２　TEL　072-949-2410
発行年月日	令和４年（2022）４月 30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長久寺遺跡（ちょうきゅうじいせき）	名古屋市東区白壁３丁目（なごやしひがしくしらかべさんちょうめ） 2801番1、2809番1、2810番1	23102	6-6	35度11分10秒	136度55分7秒	令和４年１月11日～１月31日	約215㎡	事務所ビル建設工事

所収遺跡名（ふりがな）	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
長久寺遺跡（ちょうきゅうじいせき）	集落	平安時代	道路	灰釉陶器	
	集落	鎌倉時代	溝	山茶碗、砥石	

要　約

調査地は、熱田台地の北縁の標高は約17.0mに位置する。遺構は平安時代の道路や鎌倉時代の溝などを検出した。出土遺物は主に平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗であるが、近郊からもたらされた弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器の他、サヌカイトの剥片、埴輪などを確認した。道路は、底面に波板状凹凸面があり、水はけを目的とした礫が人為的に入れられていた。検出方向から、北方に所在する片山神社との関係が示唆される。溝は底面の傾斜方向や機能時期の堆積から、区画を目的としたと考えられる。本調査でこれらの時期の集落縁辺部の様相の一端が確認できた。また、近隣で行われた既往の調査では、縄文時代中期の集落や弥生時代後期の方形周溝墓などが検出されているが、これらの時期の遺構が調査地に展開していないことを確認し、今後、集落、墓域範囲の推定など本遺跡の土地利用を考察していくうえで手掛かりとなる成果が得られた。

長久寺遺跡第２次発掘調査報告書

令和４年４月 30 日発行

編集・発行　株式会社　島田組
〒 581-0034　大阪府八尾市弓削町南 3 丁目 20 番地 2
TEL　072-949-2410
印刷・製本　株式会社　地域文化財研究所